

広大な旧満州——そのロマンと苦難の歴史

大連交通大学 国際文化交流学院 留学生 森野 昭

■ 勉強会仲間

我が学院の日本人語学留学生は、中国語授業の補強のために中国人の家庭教師を雇っている人が多い。私は元日本語教師なので、私が日本語を教え、相手から中国語を学ぶという関係で、学習会を学生とやっている。



遼寧師範大日本語科の二人と約一年勉強会をしていたが、授業が忙しくなったという理由で関係が途絶えた。そこで、今回、同じ大学日本語科一年生の女学生と勉強会をはじめることになった。

たまたま、短期留学していた中嶋さんが帰国するので、送別会をすることになり、二人も参加した。

日本語科一年生の二人は、日本語を学びはじめて未だ半年少々なので、たどたどしい日本語を話すのが、我々

とは中国語も交えての会話なので、相互の意思疎通は十分なのだ。我々留学生にとっては、会話訓練のいい機会でもある。

張さんは良く知られている工業都市「鞍山」出身である。一方、陳さんは「ジャグダチ」という耳慣れない町出身だという。簡体字で書くと「加各達奇 (jiagedaqi)」となる（簡体字「达」は日本漢字「達」であるから、日本語なら「カカクタッチ」とでも読むのであろうか？ いずれにしても漢語とは思えない発音である。

「先日、故郷では二日間つづいて雪が降りました」と彼女がいった。

日本も今春の天候は不順だそうだが、それにしても四月中旬に雪が降っているのだから、彼女の故郷は黒竜江省のなかでも相当北にある寒いところらしい。

■ 「加各達奇」から連想される旧満州へのあこがれ

パーティの後、私はインターネットで陳さんの故郷「加各達奇」を検索した。すると、ハルビンより更に北の奥地<大興安嶺山脈>の南西麓にあることが分かった。人口16万人の小都市「加各達奇 (ジャグダチ)」とは、おそらくその地に住んでいた北方少数民族の言語を漢字に当てはめた地名なのだろう。最近、大連—ハルビン間には（新幹線型）高速鉄道が開通しているから、4時間でハルビンに行けるが、そこから加各達奇へは普通の鉄道で12時間かかるという。もし、大連から普通鉄道の列車で行けば、丸一日の旅である。私の中国東北部（旧満州）への旅は瀋陽までだから、それ以北の旧満州は実に広大な地域であることがわかった（下図参照）。

旧満州の最深部「加各達奇」への驚きと共にロマンを感じている私に、同学の得永さんが、「<満州里>を知っているかい？」といった。

彼は三年前そこへ行ったことがあるという。緯度的には加各達奇よりやや南に位置しているが、

下の地図で明らかなように、ロシアと国境を接している街である。その街をすこし西に行くと草原の国「モンゴル共和国」との国境がある。



中国華北と東北部（旧満州）の地図 私が訪問した都市名を併記したが、瀋陽より北側へは行ったことがない。我が故郷、北海道の網走と較べて、陳さんの故郷「加各達奇」は更に北で、緯度では樺太に等しいし、内陸部にあるので、酷寒の冬は想像を絶するだろう。

「満州里には何があるの？」と得永さんに訊くと、

「ロシア側が見渡せるだけだ！ 街をちょっと出ると、そこには果てしもなく、ただただ草原が広がっている。その広大さと較べたら、北海道なんか箱庭みたいものだよ」

満州里はそれほど壮大な地なのか？ 太陽が海の水平線から昇り、西の山際に沈むという日本のイメージとはおよそかけ離れた光景を思い浮かべて、満州里や加各達奇のような遙かなる北満の地にロマンを感じてしまう。そして一度、行ってみたいと思えてくるのだ。



三年前に得永さんが訪れた満州里の記念写真より

■ 「満州国」 成立と満蒙開拓団

1931年、関東軍の石原莞爾や板垣征四郎が柳条湖で謀略によって鉄道破壊事件を引き起こし、それを口実として瀋陽（旧奉天）をはじめ満州を軍隊の支配下においた（満州事変）。そして、翌年には「満州国」を成立させて満州における利権を確保した。



その柳条湖事件現場のすぐ近くにある「9.18 記念館」（「満州事変」の記念館）を、私は訪問したことがある。

満州国を偽（エセ）をつけて「偽満州国」と呼び、日本帝国主義の侵略によって成立したと紹介している。

一方、日本の右寄りの論客の中には、満州国成立の過程を以下の様に記述している人もいる。満州から勃興した少数民族の満族（女真族）が中国の明王朝を倒し、清王朝を

打ち立てた。しかし、1912年に「滅満興漢」をスローガンとする孫文指導による辛亥革命により、漢族による国民政府が成立した（ここまでの記述は歴史的事実である）。ラストエンペラーとして退位した溥儀は、父祖の地「満州」で王朝を再興しようと願い、日本軍の後押しで「満州国」の皇帝に即位した。満州在住の漢族、満族、蒙古族など五族がこぞって溥儀皇帝の満州国を歓迎したというのだ。

しかし、満州国成立の首謀者の一人、石原莞爾ですら後年述べているように、五族協和の王道楽土「満州国」は名ばかりで、軍事・経済・行政などを少数の日本人が牛耳っており、五族協和とはかけ離れたものとなっていたようである。

満州国と日本人とのかかわりについては、「満蒙開拓団」が受けた苦難の歴史を忘れることができない。以下の記述は、インターネットに掲載されている「満州開拓団の悲惨な結末」から、一部を紹介する。<http://www7a.biglobe.ne.jp/~mhvip/0607HisannaSaigo.html>

日本の満州移民政策により、旧大日本帝国陸軍の関東軍は、中国農民から多くの土地を奪い、その農地に満蒙開拓団約27万人を入植させた。農地を関東軍に強奪された中国農民は、匪賊化したり、賃金労働者として、鉱山、建設、農作業等で、日本人に服さざるを得なかった。その中国人の一部は、日本人に対する憎しみから、日本の敗戦直後、鍬や棍棒により、無力な開拓団員を襲う残酷な行動に駆り立てたのである。

さらに、追い打ちをかけたのが、満州に侵攻してきたソ連軍である。凶暴なソ連軍兵士たちは、日本人開拓団の老人、婦女子、小学生、幼乳児に対して、レイプ（強姦）、暴行、殺戮、強奪の限りをつくした。このインターネット情報の中に満蒙開拓団に関する朝日新聞の解説が引用されているので紹介する。

<満蒙開拓団>1931年の満州事変後、日本で貧困に苦しむ農民を救うなどの国策として、中国東北部に送り込まれた農業移民団。食糧増産のために農作業と同時に、満州国の維持や北方警備のための役目を担わされた。1945年8月に旧ソ連軍が参戦した後、関東軍に置き去りにされた。

逃避行は集団自決なども起きて悲惨を極め、避難暮らしの飢餓や病気で多数が死亡した。敗戦時に旧満州にいた日本人 155 万人のうち、死亡者 20 万人の約四割を開拓団員が占めている。

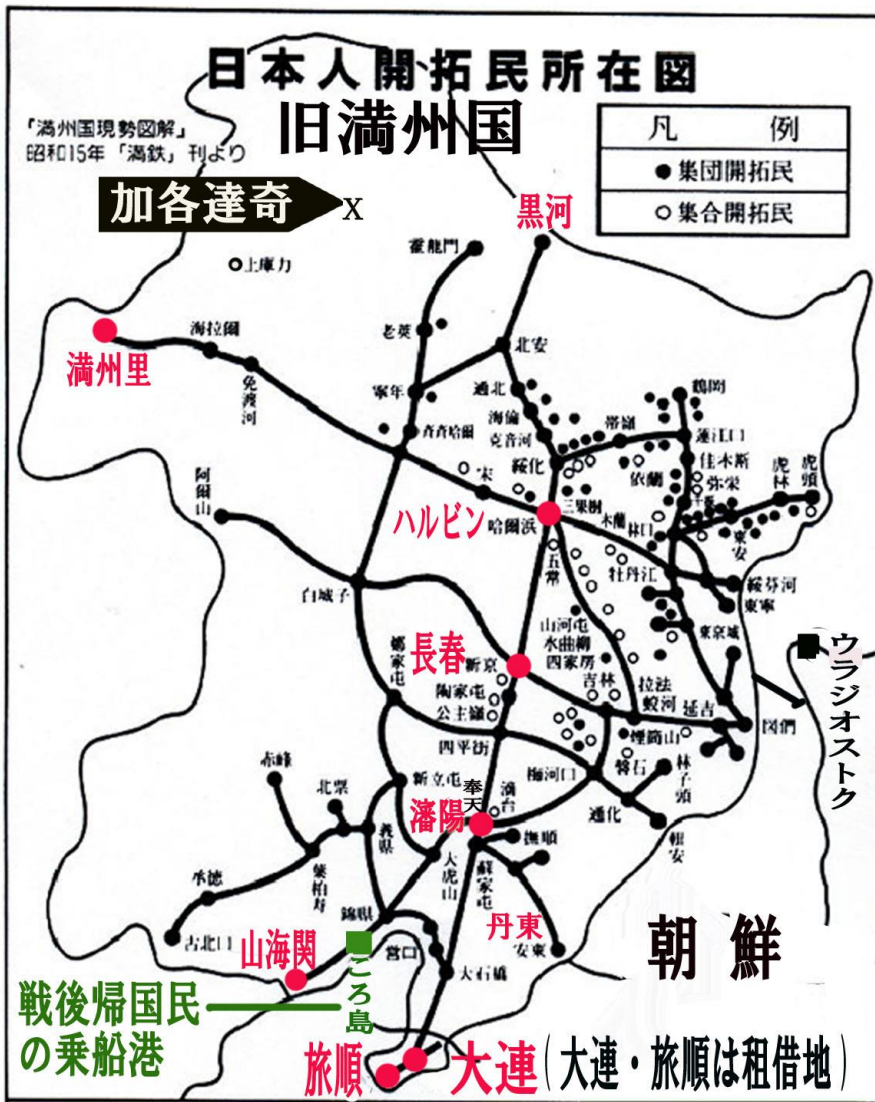
(朝日新聞朝刊 2012 年 8 月 4 日第 11 面)

【森野追記】終戦前後に中国東北部で辛酸を嘗めた日本人が多かったのだが、大連周辺にいた人々の中には少数ながら比較的幸運な人もいたようだ。満鉄本社勤めの技術者、医師など特殊技能を持っている人は戦後の中国の国家建設に協力させられた。帰国を遅らされた不運はあったものの、その家族の生活ぶりには悲惨な影が比較的少ない。そのような一人が、青春時代を大連で過ごした清岡卓行である。芥川賞を受賞した彼の著書「アカシヤの大連」には、詩情あふれる往時の大連が描かれている。私が留学の地に大連を選んだのも、この小説の影響があった。

「アカシヤ通り」と呼ばれる大連の「正仁街」には、五月後半にはアカシヤの白い花が咲く。その探訪記を我がホームページで紹介してあるので、興味のある方は下の URL をご覧いただきたい。

<https://mura346.jimdo.com/番外編-大連交通大留学/3-アカシヤの大連/>

■ 満蒙開拓団の入植地



(前頁のインターネットに掲載されている地図を引用)

満蒙開拓団の入植地を左図中の白と黒の丸印で示す。なお、主要な都市については、私が赤印で強調して示した。

入植地の最南端が満州国の最南端「山海関」である。それ以北の地には、大連—ハルビン間の南満州鉄道およびその支線に沿って、満州国の東側に多数の開拓村が散在している。

ハルビンより更に遠く離れた北満州に開拓村は少ないが、ソ連との国境にある「満州里」が西北部に突出して存在する。

北満州には黒河など三村にすぎないが、その緯度は、私の勉強仲間陳さんの故郷「加各達奇」にほぼ等しい。

それ以北のソ連との国境地帯 (Deep North) に開拓村がないのは、大興安嶺山脈に阻まれているからか？

まず、入植地の最南端が満州国の最南端と一致する「山海関」であることに注目したい。そもそも漢民族の領土とはいかなるものか？ それは、歴史的には、秦の始皇帝以来「万里の長城」以南を指していると考えてもいいだろう。その北側塞外の地は、蛮族の住む異郷の地と見做されてきた。

しかし、しばしば侵入してくる蛮族に備えるために、漢民族の各王朝は万里の長城を修復・強化した。その典型が万里の長城の最東端に位置する堅固な要塞「山海関」である。その詳細は我がホームページで紹介してあるので、興味のある方は下の URL をご覧いただきたい。

<https://mura346.jimdo.com/番外編-大連交通大留学/8-観光旅行3/>（秦皇島「山海関探訪記」）

石原莞爾らが、満州を軍事占領して満州国を建設した論理的根拠の一つは、「山海関」以北が漢民族とは関わりがなく、国家権力が存在しない無風地帯であることによるらしい。だから、そこを獲ろうと、誰に遠慮がいるものか！——と、石原莞爾は考えたのだろう。そして、日本の軍部や政府もそれを追認した。こうして、満州国が成立した。ただし、石原に一片の良心があるとしたら、山海関以南の漢民族の領土には一切手をださなかったことである（しかし、帝国陸軍は、1937年の盧溝橋事件以来、山海関以南の中国領土へも侵略し、本格的な日中戦争へと発展したのだが、それは後の話である）。

先に我が学友得永さんたちが、三年前にソ満国境の街「満州里」を訪れたことを紹介した。満州里は中国の行政区分によると、内蒙古自治区にある。蒙古族はモンゴル共和国と内蒙古自治区に二分されている。満州国はその内蒙古自治区の一部も領土としており、満州里にも入植地があった。そのために、満州と蒙古を合わせた「満蒙開拓団」という名称となったものと想像される。

満州里の一青年が日本へ留学し、得永さんたちがその青年を日本で温かく迎えたことに恩を感じた青年の父親が、得永さんたちを満州里へと誘い歓待したという。その体験談を聞いた私が、広大無辺な満州里の大自然にロマンを感じたが、その満州里が、かつては土地を奪った満蒙開拓団の入植地でもあったことを知ると、我が浪漫的な高揚感がいささかトーンダウンせざるを得ない。



が、そんな 75 歳の私ですら、戦中生まれで戦争を全く知らない世代である。得永さんと彼らを歓待した満州里の人々の写真には、往時を知っているかもしれない古老（90 歳以上？）はおられなかったようだ。得永さんたちと満州里の人々、共に戦争を知らない世代が日蒙友好交流をしたのは、平和な時代の自然な姿なのだろう。

■ むすび

以上、冒頭紹介したように、今回あらたに日本語と中国語の勉強会をはじめた、遼寧師範大の陳さんの出身地が黒竜江省の北辺の街「加各達奇」だったことから、旧満州国さらには、「満蒙開拓団」へと話題が及んでしまった。（了）

【追記】 満蒙開拓団の逃避行では、土地を奪った日本人への恨みを抱く中国人の襲撃があったことを紹介した。しかし、日本人の母親が見捨てざるを得なかった幼児を引き取り、育ててくれた中国人のいたことも忘れてはならないだろう（日本人残留孤児問題）。この問題を扱った「大地の子」（山崎豊子原作）の DVD を見たことがある。残留孤児を引き取り我が子のように愛育した中国人夫婦の姿には感動した。